

浮世絵に見る関宿

1832 年、幕府は絵師の歌川広重（1797-1858）に対し、東海道の全距離にあたる江戸から京都までの行列に帯同するよう命じました。広重が道中描いたスケッチをもとに制作した連作『東海道五十三次』は、大ヒットし、飛ぶように売れました。（実は、この連作は、道中の宿場に江戸と京都を加えた全 55 点で構成されています。）葛飾北斎（1760-1849）が有名な『富嶽三十六景』を出した直後に発表されたこの作品は、風景画を浮世絵の新たな人気ジャンルとして確立させました。その後、広重は生涯にわたって 20 作品を超える東海道を描いた浮世絵連作を制作しました。以下の浮世絵 3 作には、広重が見た 1830 年代、1840 年代、1850 年代の関宿がそれぞれ描かれています。

「関 本陣早立」(1833-34 頃)

『東海道五十三次』より

まだ夜も明けきらない頃、大名の家臣たちが、「本陣」と呼ばれる大名や公家、幕府の役人が泊まる旅籠の裏から出発する支度をしています。大名を好奇の目から守るため、幔幕がかけられています。大名が乗り込むのを待つ青い駕籠のそばで、担ぎ手たちは一日の仕事を始まる前にキセルで一服しています。この本陣は今も残っていますが、現在は個人の住宅兼建設会社の事務所として使われています。この絵は、広重が最初に制作した東海道版画連作に収録されています。

「関 旅籠屋見世之図」(1840-42)

『行書東海道』より

この絵は関宿の旅籠の「見世の間（front room）」を描いたものです。旅人が、杖と笠と荷物をそばに置いて、店先で疲れた足を足湯で癒しています。

「関参宮道追分」(1855)

『五十三次名所図会（竪絵東海道）』より

風景画としては珍しく縦長の構図で制作された浮世絵連作の一部であるこの絵は、関宿の東端に位置する東海道の分岐点の様子を描いたものです。東西からやってきた巡礼者たちは、ここから伊勢別街道を南に下って、伊勢神宮へと続く約 60km の道のりを歩きました。現在と同じように、道の入り口には鳥居がまたがっています。上部の空は、濃い青のグラデーションで彩色されています。広重はこの「ぼかし」という技法の名手で、ぼかしはゴーギャンやトゥールーズ・ロートレックといったフランスのポスト印象派の画家たちに多大な影響を与えました。